

文化の中の教育 (二)

「教える人」のいない社会で「自分で覚える」ということ

原 ひろ子

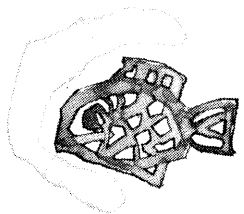
1 「師弟関係」の成立しない文化

前号で書きましたように、「人に教える」という事が、ヘヤー・インディアン文化の概念の体系の中には含まれていないのです。したがって、「教え方の上手・下手」などを評価しようということもありません。ただ、ものをおぼえる側の「おぼえ方の上手・下手」があるだけです。しかも、「おぼえ方」を教える者はいないので、自分でおぼえる」以外には、ものごとを修得する道はないのです。

右の事実からおわかりのように、ヘヤー社会には「師弟関係」というものも成立しません。「師弟関係」が成立するには、第一の条件として、当事者たちが、「教える・

教えられる」という行動が存在する事を、意識していることが必要です。さらに、第二の条件として、「教える者」と「教えられる者」の間に相互に期待される意識や行動に関して約束ごとをもっている事が必要です。

人びとの間に「師弟関係」が成立しているような社会において、第一の条件の内容、つまり、「教えるとは何か」、「教えられるとは何か」、「何について教えるべきだと考えているのか」、「実際に、何について教えているのか」などの点で、文化差があることは、ご承知のとおりだと思います。このような点で、ドイツ、米、中国、フランス、日本などのお国柄による差があるという事や、同じ国の中でも時代差が見られるという事です。さらに、第二の条件の内容、つまり、「教える者と教えられる者の間の上下関係



が全人格的なものと考えられているのか、それとも、特定の事象に関してのみ、その人間関係が成立していると考えられているのか——たとえばピアノの先生がレッスンを終った途端にお友だち同志になるかどうかといったような——、「師弟関係は一生つづくものなのかどうか——

幼稚園時代の先生が結婚式やお葬式までの人間関係を保つのか——」といったような点などに関しても文化差が存在すると考えられます。そして、このような点に関する文化差を比較する事も興味ある問題だと思っています。

しかし、カナダ北方の狩猟採集民「ヘヤー・インディアンの社会で、私の前に展開された現象は、「師弟関係」以前（？）の問題を提示しているのです。

ヘヤー・インディアンと白人との接触は一七八九年のマッケンジー郷の探検に始まり、一八〇六年にはノースウエスト会社の毛皮交易基地が建設され、その社員二人一四人（おもにスコットランド人）がヘヤー・インディアンの狩猟域に常駐するようになりました。そして一八五九年にカソリック教会がたち、歴代の神父たち（フランス人、ベルギー人、アイルランド人など）がこの地域で狩猟、漁撈をしながら生命をつないできました。一九五〇年以降になる

と交通機関が発達して、これらの白人たちは、会社や教会の本部から支給される缶詰その他の保存食を用いるようになり、猟や漁に依存する事はなくなったのですが、それ以前は、この地に生活する者は、インディアンであろうと、おもに自給自足の生活を営んでいたわけです。

二〇世紀前半にこの地域に赴任していた神父さんたちを、カナダの各地にたずねて、「当時、どうやって猟をしてみましたか」という質問をすると、その答えには、「私がベルギーから、フォート・ゲッド・ホープ（ヘヤー・インディアンの狩猟域内で教会や社会の建物のある所）についたばかりのときは、ジョシユア（インディアンの男）とよく猟に行ったものだ。彼が私の先生ですよ」とか、「私がフランスから着任したばかりのときは、アイルランド人のブラザーが猟に出かけて肉をとってきてくれたのだが、そのブラザーが病気になってから困った。その時から、だがジャン・パプティスト（インディアンの男）と猟に行くようになって、彼を先生にしてブッシュ（タイガの自然）について学んだものでした」というような話がかならず含まれていました。私の方から、「猟を誰に習ったのですか」と聞くまでもなく、「誰から教えられた」ということを答え

られてしまうのです。そして、当のジョシユアや、ジャン・バプティストは、自分が、それぞれ、神父さんに「教えた」とはつゆ思っていないのです。彼らは、「神父さんたちと一緒に猟に行った」と思っているのです。

この神父さんたちに見れば、ジョシユアや、ジャン・バプティスト以外の個人からも猟に関する情報を得たでしょうし、さらに自分一人で体得したものごともあるはずです。それなのに、特にジョシユアやジャン・バプティストから習ったというように特定の「先生」を指して、感謝の気持ちを含めて回想するのです。その時の表現は、自分の猟に関する学習体験全体を導いてくれた者としての象徴的意味を、ジョシユア個人、あるいはジャン・バプティスト個人に集約しているとさえいえます。そしてこれらの神父たちは、ジョシユアやジャン・バプティストに対して「教えてくれた人」に対する敬意を含めた親近感（「自分の教区の者」という感覚とともに）をもっています。

ヘヤー・インディアンであるジョシユアやジャン・バプティストは、これらの神父さん方に親近感をもっています。その気持ちは、「しばしば一緒に猟をした人」に対して持っているものであって、「自分が一から教えてやった者」

に対して持っているわけではありません。つまり、この場合、相互関係としての「師弟関係」は成立していないのです。

2 「人は人に指示・命令できない」という命題

ヘヤー・インディアンの生活について調査を進め、考えているうちに、私は次のような解釈に到達しました。

「教える」、「教えられる」という概念がない、ひいては「師弟関係」などが成立しないという、このヘヤー文化の基盤には、「人間が人間に対して、指示・命令できるものではない」という大前提が横たわっているのです。ここでは、親といえども子に対して指示したり命令したりすることはできない、と考えられているのです。人間に対して指示を与える事のできる者は、守護霊だけなのです。

そして人と人との関係においては、ものごとは、「自分で（守護霊の指示のもとに）おぼえる」以外はないのです。このようなヘヤーの論理を、私の心の中でつなぎ合わせ、その論理にてらしながらヘヤー・インディアンの具体的な言動を見てみるとつじつまの合うことが多いのです。こうする事によって、私は、前号で述べたような「驚き——カルチュア・ショック——」を、いちおう静める事ができる

ようになったと思います。つまり「○○を誰に習ったのですか」という質問がヘヤー社会においていかにナンセンスであり、「自分で覚えたのさ」という回答がいかに当然であるかという事についての納得がいくようになってまいりました。

では、ヘヤー社会で「自分で覚える」とはどういう事なのでようか。

3 「自分で覚える」とは

前号の終りの方に書きましたように、「自分で観察し、やってみて、自分で修正する」事によって「○○を覚える」というのがヘヤー方式です。それがどういふ事なのかを示す具体的なエピソードを、まず紹介しておきたいと思いません。

一九六二年の六月に調査を始めたときの事です。ここではみな夏の初めから冬支たくにとりかかります。六月に湖や河の水がとけ、とりどりの花が咲いて一気に夏がやってきます。しかし冬の足ははやく、九月の一日ごろには初霜がおり、九月中旬には初雪がふります。ですから六日の終りまでにマクラック（やわらかい皮の長靴）はAさんに、

ミトン（防寒用の大きい皮手袋）はBさんに、ダッフル（マクラックの中にはく軽いフェルト製の長靴型の保温ばき）はCさんに、かんじき（雪の道を歩くとき足が雪の中に沈まないように、雪の上を浮いて歩けるようになっていゝるスキーみたいなもの）はDさんと、作ってもらおうお願いをしました。

それぞれの人が、自分たちの冬支たくの合い間に私の冬物を作ってくれているようでした。いちばん手がかかり、時間もかかったのが、かんじきです。幅広でたてに長いかんじきは、白樺の木わくの中に半なめしの皮を細長くひも状にしたバビッシュが網状にめぐらしてあります。足をのせるところには長い布ひもがついています。これができ上がったのは紅葉の美しい九月の初めでした。そのころ、私は、厳しい冬をテントでキャンプしながら獲物を追いもとめるこのヘヤーの人びとと共に、自分が果たして越せるのだからかという一まつ不安を持っていました。そして、越冬のための心と身体の準備は冬の来る前からやっておかねば、と何度も自分にいいきかせていました。そんなある日、私のかんじきを手にして考えました。

「さて、冬になって、雪の上をこれでどうやって歩くの

だろう。森林の細い道を曲がったり、Uターンするとき、こんなに長いスキーみたいなのをどうさばくのだろうか、いぎ冬になって、さっさと早く歩けなかつたら、皆におくられてしまふだろう。冬の遠出で足がおそいとおいできばりにされる。そして、そんなやつかい者は、誰のキャンプにも入れてもらえなくなるだろう。ここは、誰にとつても『お荷物ご免』という社会なのだから。さあ、今のうちにかんじきで早く歩く練習をしておきたいものだ』という気持ちになったのです。

そこで、かんじきを雪のない土の上に持ち出し、Dさんにむかつて、「かんじきのひもの結び方、歩き方を覚えてい」と教えをこう気持ちでヘヤー語で話しかけました。するとDさんとまわりにいた老人たちが大笑いを始めました。それは「雪もないのかんじきなんて!!」というトンチンカンな組み合わせに対する笑いなのでした。そこを中学の教課程を経ている少女が通りかかったので、今度は英語で、「ね、教えてよ」というと、「こんなことは、教えたり教えられたりするものではないわよ。冬が来て、雪が降って、自分ではいてみればわかるわよ。そして歩くのよ」とやははり相手にしてくれませぬ。そのうちに人びとの間では「ヒ

ロコと土とかんじき」という三題話ができてしまいました。私の方は、冬になる前に、ヘヤーの世の中からほうり出されてしまったような愕然とした気持ちになってしまいました。

しかし、あつという間に冬が来て、人がかんじきををはき始めると、私は目を皿のようにして、人の足もとや足はこびを観察しました。そして、いろいろなひもの結び方を試みながらテントのまわりをぐるぐる歩いて、まだ浅い雪の上でトレーニングをしました。片足をピュンとはねあげて、他の足を軸として、身体をくるっとねじってUターンする方法も見よう見まねで覚えました。

「土にかんじき」の笑い話を伝え聞いていたおばあさんが、「雪にかんじきならさ、まになる。ヘヤー・インディアになったかね」といつてまた大笑いしました。

こうなると、「かんじきのはき方を誰にやらいましたか」と聞かれた場合、私だって、「自分で覚えたんです」と胸を張って答えるほかありません。

— つづく —